

大般若経読誦音に於る漢音混入について

沼本克明

一 大般若経音義に於る漢音の混入

二 大般若経字音奥に於る漢音の混入

三 纏め

先に「図書寮本類聚名義抄」真興音（和音）論
続貂に「国語と国文学」昭和五年十月号」とい
う拙論を物し、真興和音に漢音系字音と思われも
のが含まれているのは、そのもとになつた大般若経
本文読誦音に既に漢音が混読されていた為である事
を論証した。本稿はそれに続くものとして、もとに
なつた大般若経読誦音そのものに於る漢音の混入の
実態を追究したものである。

一 大般若経音義に於る漢音の混入

(1) 石山寺本大般若経字抄の場合

本書が藤原公任の撰になる事は渡辺修氏に依つて
明らかにされた。公任はそこでの注音法を次の様に
記す。「(前略)今任卷軸之次、注以漢吳二音相同之
字、雖其音不遠、至于淺習、不通知之字、不敢用之、偏依吳音
別戴正音、或以假名注之(後略)」（ニセウ234）。
これを本文の音注を勘え合せて、解釈すれば次の様
になる。(a) 吳音で読めば被注音字の吳音を、漢音で
読めば被注音字の漢音を示す様な漢字一字で注音し
た。但し、淺習不通知之字の注音字とならざるを得
ない場合はそれは用いず、(b) ただ吳音に依つて注し
正音（漢音）は別に示した。(c) 或は（吳音を）仮名
で注し（漢音は別に示した。具体例では、次の様

なものがそれぞれに該当する。

(ウ)の例 照怡正基伊(一オ3)、抑音同詳(一オ3)、軛音厄(一

オ3)、庠音同詳(一オ3)、等

(ウ)の例 脛音脛(一オ4)、項音享(一オ6)、

孝樂正光(一ウ1)、諸各反音道爆音道(一ウ2)、等

(ウ)の例 魁膾音魁(二オ3)、渠列音ウ竭音ウ(三ウ5)

反胡對音以殘音残(四ウ6)、音ウ蝎音ウ(九オ2)、烏飯音承以猥音承(九

ウ1)、等

(ウ)の例について、試みに広韻について調べてみる

と、

照(之韻平声曉母)―基(之韻平声見母)

怡(之韻平声喻母)―伊(脂韻平声影母)

抑(職韻影母)―億(職韻影母)

軛(支韻影母)―厄(支韻影母)

庠(陽韻平声邪母)―詳(陽韻平声邪母)

の如くになり、この傾向は全体に亘る。即ち、漢音

としてみる時韻書で同音とならないものが含まれる

のであって、その漢音(正音)の内実が、呉音と同

様、日本漢字音としての範疇(極言すれば仮名書音

形の範疇)で把握せられている事を物語っている。

但し声調については殆ど相違が無い所から判断して、

呉音と漢音は、仮名書音形と声調がその弁別特徴と

せられていた事になる。

次に(ウ)について広韻で調べてみると、

脛(青韻去声見母)―脛(青韻上去声匣母)

―脛(青韻平去声見母)

況(陽韻合口去声曉母)―項(講韻上声匣母)

―享(耕韻上声匣母)

孝(肴韻去声曉母)―樂(肴韻去声疑母)

―孝(宵韻平声疑母)

藉各反(広韻禰各反同音)・博教反(広韻北教反

同音)―瀑(鏗韻幫母)・肴韻去声幫母)

―迫(陌韻幫母)

の如くになる。ここでも「脛見母」↓「脛匣母」、

「孝曉母」↓「樂疑母」の如く漢音に於いても韻書

で一致しないものが含まれる。右の中でも「孝」↓

「樂」は仮名書音形の範疇にしてもあまりに差異が

大きすぎ不審である。「況」↓「項」の対応も正音

注と見る時は差違が有りすぎ、この「況」は「正」

が加えられていない所から見ると、「音辛」と共に

呉音形を示していると思われるべきかも知れない。そう

言えば、慈光寺本では「ク斗ヤウ二例」「カウ一例」

の付音が有り(これについては松尾氏の注解が有る)、

安田本に「項音項」(卷五四)等と有るので、或

いは、吳音として、「カウ」、「クキヤウ」の二形が伝承されていた事を反映しているとも十分考えられる。

次に(1)について見るに、公任の意図では、仮名書形は全て吳音を示した事になるはずであるが、「魁音以(孟声)」は仮名書音形として、「クワイ」となり明らかに漢音形である(高知安田八幡宮蔵大般若經字音点、「魁膾卷四」、無窮会本大般若經音義、「魁膾惠」へ一秩四卷)と有り吳音、「クエ平声」。即ち、公任が吳音を示したと言いつつも、実際には漢音形が記載されてしまっているのである。この事は、公任が序文で述べた原則は必ずしも正確に実行されていないものであつて、この經字抄全体がその様な性格を有していることを前提としなければならず、その取扱いに十分注意する必要がある。

今その詳細は省略するが、右の事実を踏まえて分析した結果、吳音注にあたるものであつても次の諸音注が漢音形を表示したと考へざるを得ないものとして浮び上つて来た。

喙音火(一ウ六・四ウ六・一七ウ七)
魁音火膾音火(二オ三)
標音火(三ウ五・一三オ六)
勵音火頰音火(五オ三)・勵音火(六ウ三)

芳音火車音火(八オ六)
寔音火車音火(九オ二)

串音火患音火(九ウ三・二六オ七)

健音火(一ニウ六)・健音火(二ニオ一)

環音火(一三ウ三・一四ウ三・一九ウ六)

寰音火(一六ウ四)・環音火(一ハウ五)

即ち、右の諸字は、漢音吳音の区別で言へば、

喙音火多音火トク、魁音火多音火トク、標音火多音火トク、勵音火多音火トク、

芳音火多音火トク、寔音火多音火トク、串音火多音火トク、健音火多音火トク、

塊音火多音火トク、寔音火多音火トク

となるのであり、その音注は全て漢音形に該当するとしが帰納出来ないものである。

それでは、なぜ右の諸字に漢音形が出現したのであろうか。それを知る手掛りを「健」に見出す事が出来る。この「ケン」と注音された「健」字は、經字抄ではいずれも「徐策」の前に位置しているから大般若經本文「有兩健人各扶一腕。徐策令起而告之言」(大正藏第六卷五九三頁中段)の「健人」という熟語に対してである。今この「健」字にうき、安田本の付音例を検すると、「健」達縛音火三(巻数以下同じ)、「健」達縛音火49、「健」達縛音火4、「健」達縛音火32、「健」人44、「健」人56に漢音形が見られ、

「健行 36」 「健行 41 52」 「勇健 53」 「勇健 21」
 「兩健人 312」 「勇健 32」 に呉音形が見られる。
 即ち、「健達縛」 「健人」の二熟語形にのみ漢音形
 が出現している。この事実を經字抄の注音に結びつ
 けてみる時、その「ケン」は、公任が「大般若經本文
 の読誦音として出現していた「健人」の音として採
 用したものであつた事になるであらう。かくして、
 經字抄は、音義という体裁を取り、而も独自の注音
 法に依つて、掲出字一字一字の呉音をへそして大部
 分のものについては漢音をもも示すとはうたい下
 ら、実際には、その音義の本文たる大般若經の読誦
 音形から脱脚し得ていない部分が含まれていたのだ
 ある。右に掲出した漢音形のみを音注は、その大般若
 經読誦音の生の姿をそのまま反映した所にその出
 現の原因が在つたと考えられる。大般若經読誦音に
 なせ漢音形が混入したかは、次の段階として後に言
 及する。

(ロ) 無窮会本系大般若經音義の場合

以上の經字抄に對して、無窮会本系の諸音義の注
 音法は、同じく同音字注を主体とする形態を取りな
 がら、實質は、呉音・漢音が同時に示される様な字
 を選んで加えられたのではなく、唯大般若經本文の

読誦音形一形のみを示すものと解釈せざるを得ない
 が如くである。若干の实例に依つてその事を確認し
 ておきたい。

- 「檐」 讀 顧 鴉 泰 貌 照
- 「怡」 頻 貪 覺 韻 院 滯 抑 歷
- 「輒」

(無窮会本一丁オ、必要部分のみ掲出)

右の部分について言えは、「湛」 「交」 「貧」
 「億」 「略」 「亦」の如き場合は、被注音字との関
 係で見ると、注音字を呉音で読めば被注音字の呉音
 形を、漢音で読めば漢音形を示し得ていると見なし
 得る(但し言うまでもなく仮名書音形の範疇でのこ
 と)。但しここではもはや声調にまで考慮は払われ
 ていない(例えは「嬌」は韻書上声、「交」は韻書
 平声)。以上に對して、「去」 「躡」 「妙」 「院」
 の如きは、それを漢音で読んでも被注音字の漢音と
 ならない事は明らかである(例えは「躡」は漢音
 「テイ」、「泰」は漢音も「タイ」)。そこで別の
 観点から、右の諸例の注音字を呉音で読んで被注音
 字と比べてみると、大旨矛盾なく対応していると思
 なす事が出来る。然し、右に取挙げた部分以外に範
 圍を広げて検討してみると、次の様な、その観点で

も解_レ釈_レ不_レ可_レ能_レな_レものか含まれている。

漢_語 濁_音 63 (第六 卷の部の意)、44、

掩_音 109、41、43、

「泥」字は吳音形「ナイ」であろうから、この注
音字を吳音で読んでは「湊」の吳音を示し得ていな
い。漢音「テイ」と読む事に依つて「湊」の吳音
「テイ」を示しているとしなければならぬ。但し
この場合には「泥」に濁声点を加えられているから
「吳音で読まない場合には、声点等とその事を示し
ている」として説明はつく例である。然し「次」の
「掩」はその様な説明は不可能である。「闇」は聲
韻字で吳音「オム」、漢音「アム」である。「掩」
は塩韻字で吳音「アム」、漢音「エム」である。即
ちこの場合は、「闇」の漢音形で「掩」の吳音形を
表示したものとしか解_レ釈_レ出来ないのである。

かくして、この系統の音義の同音字注は、多くそ
れを吳音で読めばそれが被_レ注_レ音_レ字_レの音形を示してい
ると見なし得るが、まゝ漢音で読まねばならないも
のも含まれているのであり、必ずしも一貫した嚴密
な規則に従つて加えられたものではないとせねばな
らない。同音字注として用いられている漢字の性格
としては、

④ 吳音・漢音共に同じ仮名書音形になるもの

⑤ 吳音と漢音が異なる仮名書音形になるもの
⑥ の場合には、それが吳音・漢音のいずれが取られ
て注音されたのかは、同音字注のみを見たのでは解
釈出来ないであつて、被_レ注_レ音_レ字_レも同時に考え合せ
て、一字一字の「解_レ読_レ」を行わねばならないもので
ある。にも係らず、この音注が意味を持つ——換言
すれば、その様な一対一の關係でない注音法でも音
注としての機能が果され得ていた——のは、これが
「大般若經読誦音」を示す為のものであるから吳
音が基盤になつてゐる」という大前提が共通認識と
して一般に存在していたからにちがいない。

この系統の音義の音注でもう一つ注意しておく必
要があるのは、「全漢 魏_音 (濁) 111、全漢 羅_音 (濁) 113、全漢 瀑_音 (濁) 26、全漢 殘_音 (濁) 59」等の如く、同音字注は必
ずしも清濁まで対応してゐないものが含まれてゐる
という点である。「貴」は微韻合口去声見母字であ
つて吳音・漢音共に清音である。その清音字に濁声
点を加える事に依つて、被_レ注_レ音_レ字「魏」の音を示し
てゐる。これに対し、「玄」は韻平声匣母字で吳音
は濁音であるから、その濁音字に單声点を加える事

に依つて、被注音字「羅」の清音を示していると解釈出来る。この声点が音義編述時から加えられていたものかどうかは今直ちに決定出来ないが、いずれにしても、同音字注は文字通り片仮名に準ずる用法として仮名書音形のみしか示さないものとして使用されていたと考へねばならない（声点が編述時に音注の一環として加えられていたとすれば、声点と一体になつて清濁の区別も一応なされていたという事になり、声点加後の加點とすれば、この音注は清濁については全く考慮が払われていないものとして成立した事になる）。そして現状の無窮会本でも「濁玄₅₂」「總貴₄₁」の如く声点の無いものも多く有り、清濁についてはそれが厳密に区別されていない事を認めねばならない。この様な例は他にも指摘する事は容易である（瞬_{順42}、仰向₄₄等）。同音字注に殆ど声点の無い天理本・薬師寺本に於ては、一層その清濁は不明である事は言うまでもない。

この様に、無窮会本系の大般若経音義に於ては、大般若経字抄と同じ同音字注を主体としながらも、その内実は本質的に相違するものである事を前提として取扱わねばならないのである。

扱、以上の検討の結果を考慮して無窮会本系の音

施之	瑕加	螢計意	繪界	誨	映	暇可	無窮会本
51	51	14	13	11	11	11	
施之	瑕加	螢計意	繪界	誨	映	暇可	天理本
51	51	14	13	33	11	11	
施之	瑕加	螢計意	繪界	誨	映	暇可	薬師寺甲本
325	62	14	42	510	11	314	
施之	瑕加	螢計意	繪界	誨	映	暇可	薬師寺乙本
51	51	14	42	49	11	335	

義の音注を分析した結果、被注音字の音形が漢音になると解釈せざるを得ないものが、次の如くに残つたのである。（各音義で原則として初出する例のみを示す。音義に依つて同一個所の音注でも異なるので、その場合、異音形を示している音注は○に入れて示す。所在は「1」は第一帙一卷の部分の字である事を示す。四十三字及び陀羅尼は省略し、後筆も除外してある。空欄は欠損部。）

(環巻 40g)	(時教 40g)	(帯鉢 40g)	鶺鴒 40g	鶺鴒 40g	(汎凡 40g)	鼓居 351	敏音 32g	摸音 313	欽記音 182	葵別 182	葵別 137	祐巻裏 136	麗例 115	漁義余 115	痛例 87	零例 63	虎居 63	塊果意 59	慕音 57	啄宅 56	範破△ 54
(環巻 40g)	(時教 40g)	(帯鉢 40g)	鶺鴒 40g	鶺鴒 40g	(汎凡 40g)	鼓居 351	敏音 32g	摸音 313	欽記音 182	葵別 182	葵別 137	祐巻裏 136	麗例 115	漁義余 115	痛例 87	零例 63	虎居 63	塊果意 59	慕音 57	啄宅 56	範破△ 54
環巻 40g	時教 40g	帯鉢 40g	鶺鴒 40g	鶺鴒 40g	汎公 40g	鼓居 351	敏音 456	摸音 440	欽記音 342	葵別 443	葵別 404	祐巻裏 136	麗例 577	漁義余 115	痛例 87	零例 63	虎居 63	塊果以 3310	慕音 559	啄宅 63	
(環巻 40g)	(時教 40g)	(帯鉢 40g)	鶺鴒 40g	鶺鴒 40g	(汎凡 40g)	鼓居 391	敏音 464	摸音 519	欽記音 342	葵別 462	葵別 430	祐巻裏 430	麗例 115	漁義余 115	痛例 87	零例 63	虎居 63	塊果以 59	慕音 57	啄宅 56	範破△ 55

ちなみに言い添えておけば、右の例は、漢音形を示したと解釈せざるを得ないものであつて、この他に、漢音形を示したと解釈出来る例は多数存するのである。

誨(一)無窮会本) ↓ 誨(一) (薬師寺本) に於ける薬師寺本「悔」は「誨」の呉音を示したものであるとの前提に立ちその呉音「クエ」を示したと解釈したのであるが、無窮会本「クワイ」に従い、その漢音「クワイ」で注したと解釈出来ない事は無い。

「領令」「帯鉢」「時教」等皆そうである。

更に亦、

滯(存) 嘉立部	勵例 嘉立部	投(音) 嘉立部	虹劫 606	圖例 594	弩士 594	歐(音) 569	戮(音) 561	眠(音) 559	謹記音 464	堆(音) 461
			虹劫 606			(戮(音) 574)	眠(音) 559	謹記音 464	堆(音) 461	
			虹劫 606	圖例 594	弩士 594		戮(音) 561	眠(音) 559	謹記音 464	堆(音) 461

鶯 <small>ウ</small>	19						
荏 <small>シ</small>	40						
苒 <small>ニ</small>	40						
拏 <small>ナ</small>	60						

の如きは、それそれ「鶯」ウ、「荏」シ、「苒」ニ、「拏」ナの音形を示していると解釈せざるを得ないものであるが、それ等はいずれも漢音形に該当するらしいのであるが、吳音として期待される「コ」ク、「モク」モク、「ニム」ニム、「ネム」ネム、「ナ」ナが管見の範囲で全く見出せない為に、断定を差し控えざるを得ないものであつて、この類のものも右表からは除いてある。

従つて、右に取り挙げた例は、無窮会本系大般若經音義に少くともそれだけの漢音形が含まれている事を示すものであつて、実質上は更に増加する可能性を認めておかねばならない。

初、では、右の漢音形はなぜ出現したのであろうか。結論は、大般若經字抄に同じく、大般若經本文の読誦音形が反映した為と考えられる。

その裏づけとして、漢音形の出現した漢字は、多くの場合、特定の漢語に使われるものである事が挙

けられる。

- 暇カ—無暇
 - 映イ(映)—暉映、映蔽、映奪
 - 誨イ—教誨
 - 檜イ—檜檜
 - 螢イ—螢火
 - 嶺イ—雪嶺
 - 瑕カ—瑕隙
 - 施シ—施設、張施
 - 範ハ—軌範、師範
 - 喙ク—喙噉
 - 塊ク—石塊
 - 虎コ—虎豹、虎狼
 - 零イ—零落
 - 癘イ—疫癘
 - 漁ギ—漁獵
 - 麗イ—殊麗、綺麗
 - 祐ウ—福祐
 - 篋ク—篋房車
 - 輕ク—輕蔑、凌(陵)蔑
 - 欽キ—欽仰
 - 模カ—揆(規)模
- (施張シキヤウ) (字類抄)
- (零落シヤク) (字類抄)
- (福祐フクウ) (字類抄)
- (規模キモ) (字類抄)

敏ビシ—聡敏

鼓コ—天鼓、法鼓、鼓散

汎フシ—汎漾

鷺ソ—鷺鷥

鶺鴒セウ—鶺鴒

帶タイ—幃帶

哨ショウ—吟哨

環カン—巡ハ（循）環、紅環

堆タイ—堆阜

謹キン—謹慎

昵ニシ—津シ（親）昵

歎トウ—刑歎

琴キン—弓琴

罔コウ—罔圜

虹コウ—虹蛇

勵レイ—勵勵

聡敏ソウミン（字類抄）

堆阜タイブツ（字類抄）

謹慎キンシ（字類抄）

親昵シンニシ（字類抄）

罔圜コウエン（字類抄と部）

虹蛇コウダ（字類抄と部）

それそれ—線の下に示した漢語として出現する（以上の熟語の認定は無窮会本系音義の掲出順序を手掛りに、縮刷蔵経所収慧琳一切経音義・可洪新集蔵経音義隨函録の大般若経部及び大正蔵所収大般若経本文に依つて確認した）。これ等を試みに前田・黒川両色葉字類抄に比較してみると（下段に字類抄とし

て示した）字類抄でもやはり殆んど漢音形で出現している事を知るのである（中世から近世に降つた古辞書類に比較すると更に一層比較可能の語彙が増加するが、それでも傾向は同じで、両者の音が殆ど一致する事を付加しておく）。この事は、相互の影響関係は今不明としなければならぬが（即ち、日常常用語としての読み方が大般若経読誦に流入したのか、古采からの大般若経の読み方が日常語化したのか、というどちらからどちらに流れたものかは未詳であるが）、ともかく語彙音としての読み方が大般若経読誦音に存し、それが無窮会本系音義にそのまま採用されたものと考えられるのである。その裏づけとしては、例えば次の事実を挙げ得る。「布施」という語は大般若経には多出するのであるが、無窮会本音義ではその語に当る部分の「施」は全く掲出されていないのであつて、これは字類抄にも「フセ」と異音形で読まれて掲げてある様に、特に掲出する必要が無く、ただこの「施」を「シ」と読む場合のみそれを示す為に掲出される必要が有つたと考えられるのである。

ところで、先に示した一覧表で分る様に、例えば、薬師寺甲本では一帙一卷部に示された「暇」には

「下(ケ)」の音注が有り、三一帙四卷部では「可(カ)」の音注が有る如く、統一性が欠けているものが多い。その本にも存するのである。この事象も実は、それだけの音義の本になつた大般若経読誦音に於るゆれが原因ではないかと考えられるのである。それは、次述の大般若経字音点の実態から推定される所である。

以上、無窮会本系音義に依れば、そこにも漢音形が見出され、それが大般若経読誦音に於る語彙音として固定した漢音形の反映という一面の存した事が指摘出来るであらう。

二、大般若経字音点に於る漢音の混入

概、以上「大般若経音義」について検討したのであるが、そこでは掲出字の分量が限定されている事や、単字掲出である事、亦同音字注が基本になつてゐる為に具体的音形が明確でない事、が障害となつて、尚分明にし難い点が残る。そこで次に、具体的な字音点に依つて、漢音混入の具体相及びその要因について検討を深めてみたい。

ここで取挙げた資料は安田本大般若経鎌倉初期点(東辻保和氏、安田八幡宮蔵大般若波羅密多経の音

注(資料)である。この資料で漢音形の見出される音注を巻数順に抜き出し韻鏡の韻目順に列挙した。参考資料として慈光寺本大般若経平安後期字音点(松尾拾氏、慈光寺蔵大般若経の字音点について)の分韻表(「慈」と略)、天理本大般若経音義(無窮会本は巻首欠損の為に「天」と略)、法華経单字(法華経読誦音形を知る為「(単」と略)、高山寺本新訳華嚴経音義(華嚴経読誦音を知る為「(華」と略)、観智院本名義抄和音(「名」と略)、圖書寮本名義抄(「(図」と略)等の音注を示した。

- 紅コウ (東平匣) .. 紅コウ 418 紅蓮華 1、紅コウ 128、紅コウ 331、紅コウ 346、紅蓮華 380、紅コウ 381、紅コウ 381、紅コウ 558。(慈)コウ(2)。(内例数)。(天)紅コウ へ篇立部。(名)木具ウコウ。(図)真云グコウ 300。
- 虹コウ (東平匣) .. 虹コウ 506。(慈)コウ(1)。(天)虹コウ 60。(華)虹コウ 374 377。
- 聾コウ (東平来) .. 聾コウ (字体ママ) 448、聾コウ 者コウ 3、聾コウ 325 570、聾コウ 435。(慈)リヨウ(1)。
- (天)聾コウ (篇立部)。(名)禾リヨウコウ 121。
- (単)聾コウ (華)聾コウ 371、聾コウ 373。

魚イサ (魚平疑) .. 魚イサ 191、魚イサ 429、魚イサ 502。(天)

又マタ 1205。(天) 魚イサ 木キ 又マタ ココ 1201、數スウ 漢カン 木キ 同
又マタ 1205。(天) 真マコト 云クニ キキ 60。(單) 數スウ 五イ 於ニ 115、魚イサ

諸居モトメ 12S。

摸モ (摸平明) .. 摸モ 303、規キ 摸モ 440、作サス 摸モ 584、規キ 摸モ 560。

(天) 摸モ 貴キ 摸モ 31。

謨モ (摸平明) .. 南ナン 謨モ 佛ブツ 陀タ 462 — 南ナン 謨モ 佛ブツ 陀タ 363。(天)

南ナン 謨モ 木キ 音オン 暮モ 91。

慕モ (摸去明) .. 慕モ 多タ 47、慕モ 法ホフ 398、慕モ 法ホフ 399、慕モ 多タ 411。

慕モ 善ゼン 562。(天) 慕モ 善ゼン 57、慕モ 善ゼン 52。(名) 木キ 下カ 910。

(單) 慕モ 部ブ 於ニ 117。(華) 慕モ 善ゼン 375。(聖語藏本央極)

魔羅經マラキヤ 慕モ 。

徒ト (模平定) .. 徒ト 徒ト 自ジ 45、徒ト 衆シュウ 327、非ヒ 徒ト 568。(慈)

ト (1)。(南海歸寄内法傳卷二) 法ホフ 徒ト 。

弩ヌ (模上泥) .. 弩ヌ 584。(天) 弩ヌ 土ツ 593。

鼓コ (模上見) .. 鼓コ 鼓コ 一イツ 天テン 鼓コ 381、法ホフ 鼓コ 456。(天)

鼓コ 居キ 391、鼓コ 々ツ 570。(名) 木キ 下カ 1124。(單) 鼓コ 五イ 33。

虎コ (模上曉) .. 虎コ 豹ハヤシ 53、虎コ 豹ハヤシ 414 — 虎コ 咆ホウ (琥に同じ)

398 399 441。(天) 虎コ 居キ 3、虎コ 居キ 琥コ 咆ホウ 魄ハク 406。(名)

木キ 下カ 851、(天) 琥コ 珀ハク 真マコト 云クニ ハハ 7 159。(單) 虎コ 咆ホウ 去キ 於ニ 反ヘン 20 有アリ)

90。(法華經音には別に、虎コ 去キ 於ニ 反ヘン 20 有アリ)

盧ロ (模平來) .. 蘊イン 迷ミ 盧ロ 山サン 3 — 北キタ 俱ク 盧ロ 州シュウ 1。(慈)

蘊イン 迷ミ 盧ロ 山サン。(名) 木キ 下カ 10 850。

鷓セ (皆開平徹) .. 鷓セ 鷓セ 398。(天) 鷓セ 鷓セ 408。(菜甲)

鷓セ 鷓セ 408。

啼テイ (皆開平徹) .. 啼テイ 泣キ 398、啼テイ 泣キ 399 — 常ジョウ 啼テイ 菩薩ボサツ 398。

(天) 啼テイ 帝テイ 48。(名) 木キ 下カ 夕セキ 146。(單) 啼テイ 長チヤウ 122。

掃スイ (皆開平徹) .. 掃スイ 字ジ 門モン 53。(天) 掃スイ 掃スイ 門モン 63。

滌テイ (齊開去端) .. 滌テイ 數スウ 341。(天) 滌テイ 掃スイ 掃スイ 門モン 63。

(天) 滌テイ 真マコト 云クニ テテ 50。

帝テイ (齊開去端) .. 剎シャツ 帝テイ 利リ 103、剎シャツ 帝テイ 利リ 105 — 勝ショウ 帝テイ 2、

帝テイ 相シャウ 52、帝テイ 網マウ 392、帝テイ 青セイ 399。(名) 上ジョウ 諱ケツ 夕セキ 698。

(單) 帝テイ 界ケイ 60。

泥ナイ (齊開平去泥) .. 掘コウ 泥ナイ 99、壘ライ 泥ナイ 耶ヤ 499、香キヤウ 泥ナイ 塗ツ 地チ 569、淤オ 泥ナイ 593 504。(天) 泥ナイ 塗ツ 真マコト 云クニ ナナ イイ テテ 227。

(單) 泥ナイ 塗ツ 度タク 73、泥ナイ 塗ツ 55。(華) 淤オ 泥ナイ 塗ツ 370 377、泥ナイ 塗ツ 療リョウ 372 373。

契ケイ (齊開去溪) .. 期キ 契ケイ 450、期キ 契ケイ 329 — 契ケイ 深シン 法ホフ 1、契ケイ 經キヤウ 127、契ケイ 契ケイ 562。(慈) カカ イイ (2)。

麗レイ (齊開去來) .. 殊シュ 麗レイ 105、戲キ 麗レイ 127、綺キ 麗レイ 381 399、殊シュ 麗レイ 502、綺キ 麗レイ 531、殊シュ 麗レイ 540 557、褐カク 麗レイ 566、麗レイ 日ニチ 567 —

殊シュ 麗レイ 499。(天) 麗レイ 例レイ 11、褐カク 麗レイ 例レイ 567。

(天) 真マコト 云クニ レレ イイ 343。(華) 崇シュウ 麗レイ 368、殊シュ 麗レイ 370、精セイ

殊シュ 麗レイ 499。(天) 麗レイ 例レイ 11、褐カク 麗レイ 例レイ 567。

(天) 真マコト 云クニ レレ イイ 343。(華) 崇シュウ 麗レイ 368、殊シュ 麗レイ 370、精セイ

麗 370、巨麗 371。

良 (齊開去來) 蕪 430 蕪 127、蕪 128、蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

堆 (天) 蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

堆 對 施 4310。(天) 蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

堆 對 施 4310。(天) 蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

堆 對 施 4310。(天) 蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

堆 對 施 4310。(天) 蕪 477、蕪 552。(慈) 蕪 477、蕪 552。(天) 蕪 536、蕪 477、蕪 552。

灰 (灰平曉) 灰 599 灰 570、灰 583。(慈) 灰 599 灰 570、灰 583。(天) 灰 599 灰 570、灰 583。

灰 (灰平曉) 灰 599 灰 570、灰 583。(慈) 灰 599 灰 570、灰 583。(天) 灰 599 灰 570、灰 583。

塊 (灰上溪) 塊 49、塊 350。(慈) 塊 49、塊 350。(天) 塊 49、塊 350。

塊 (灰上溪) 塊 49、塊 350。(慈) 塊 49、塊 350。(天) 塊 49、塊 350。

公云火 216。

誨 (灰去曉) 誨 448 誨 510 誨 1、誨 12、誨 2、誨 3、誨 337 誨 348、誨 479。(天) 誨 1、誨 12、誨 2、誨 3、誨 337 誨 348、誨 479。

誨 (灰去曉) 誨 448 誨 510 誨 1、誨 12、誨 2、誨 3、誨 337 誨 348、誨 479。(天) 誨 1、誨 12、誨 2、誨 3、誨 337 誨 348、誨 479。

懷 (皆合平匣) 懷 300、懷 438 懷 1、懷 2、懷 570、懷 581。(單) 懷 45。

懷 (皆合平匣) 懷 300、懷 438 懷 1、懷 2、懷 570、懷 581。(單) 懷 45。

敏 (真上明) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。(天) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。

敏 (真上明) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。(天) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。

敏 (真上明) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。(天) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。

敏 (真上明) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。(天) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。

敏 (真上明) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。(天) 敏 318、敏 319、敏 446、敏 454、敏 513。

木 184 木 1271。(華) 木 184 木 1271。(天) 木 184 木 1271。

昵 (質泥) 津 534。(慈) 津 534。(天) 津 534、津 534。(天) 津 534、津 534。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

勤 (欣平群) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。(名) 勤 579 勤 399、勤 554、勤 530。

(1)。(天)健建^{クニ}。 (名)木見又去^キコン45。

(単)健^{クニ}後^ノ領^ノ 112。(華)充^{チヨウ}健^{ケン} 317。

繁^シ(元合平奉)・无^ム繁^シ天^{テン} 100 151 134、无^ム繁^シ天^{テン} 168——无^ム繁^シ天^{テン} 168

天^{テン} 103。(慈)ホ^ホン(2)。(天)繁^シ番^{バン}へ滿^{マン}立^{リツ}部^ブ。

誼^ジ(元合平睦)・誼^ジ詩^シ 415、捨^{セツ}誼^ジ 479——捨^{セツ}誼^ジ 1、誼^ジ雜^{ザク}

306 306 333 366、誼^ジ雜^{ザク} 415、不^フ誼^ジ 501。(慈)ク^クワ^ワン(1)。

(天)誼^ジ卷^{クワン}1。(凶)誼^ジ誼^ジ上^{シヤウ}公^{コウ}云^{ウン}上^{シヤウ}官^{カン} 82。(華)

誼^ジ續^{ジツ} 369、誼^ジ 371。

喧^{ケン}(元合平睦)・喧^{ケン}雜^{ザク} 441——喧^{ケン}詩^シ 53、喧^{ケン}雜^{ザク} 54 551 563 565

568、不^フ喧^{ケン} 557。(慈)ク^クワ^ワン(3)。(天)誼^ジ卷^{クワン} 喧^{ケン}上^{シヤウ} 568

1。(名)上^{シヤウ}喧^{ケン}化^カン(、和^ワしなし)。(、誼^ジに同じ)

婉^{マン}(元合上影)・婉^{マン}約^{ヤク} 381、婉^{マン}約^{ヤク} 469、婉^{マン}約^{ヤク} 531。(慈)

ツ^ツ(1)。(天)婉^{マン}約^{ヤク} 479。

刑^{ケイ}(鎔合疑)・刑^{ケイ}足^{ソク} 582。(天)刑^{ケイ}月^{ゲツ} 592。

髮^ヘ(月合非)・髮^ヘ 566——髮^ヘ毛^{モウ} 53、髮^ヘ毛^{モウ} 54、布^フ髮^ヘ 99、

毛^{モウ}髮^ヘ 341、髮^ヘ毛^{モウ} 381、耳^ニ髮^ヘ 387、首^{シュ}髮^ヘ 381、髮^ヘ毛^{モウ} 414、髮^ヘ毛^{モウ}

毛^{モウ} 531、首^{シュ}髮^ヘ 539、布^フ髮^ヘ 557、髮^ヘ毛^{モウ} 568、剃^シ髮^ヘ

54。(慈)ホ^ホン(1)。(天)髮^ヘ 109。(単)髮^ヘ普^フ湯^{トウ}

／普^フ湯^{トウ} 音^{オン}讀^{ドク} 本^{ホン} 31。

蔽^{セツ}(刪開上娘)・蔽^{セツ}然^{ゼン} 399、蔽^{セツ}然^{ゼン} 399。(天)蔽^{セツ}雜^{ザク} 409。

(名)吳^ウ、暖^{ナン} 1126。

顏^{カン}(刪開平疑)・顏^{カン} 381、顏^{カン} 531、顏^{カン} 534、顏^{カン} 570

381、顏^{カン}容^{ヨウ} 451、顏^{カン}容^{ヨウ} 516、顏^{カン}容^{ヨウ} 531、舒^{シュ}顏^{カン} 569、舒^{シュ}顏^{カン} 570

顏^{カン}容^{ヨウ} 330。(慈)カ^カン(1)、ケ^ケン(1)。(天)顏^{カン}賢^{ケン}

顏^{カン}容^{ヨウ} 391。(名)木^キ下^カン 282。(単)顏^{カン}後^ゴ山^{サン} 62。

暖^{ナン}(桓上泥)・能^ネ暖^{ナン} 430——能^ネ暖^{ナン} 128。(天)暖^{ナン}雜^{ザク} 138。

(名)木^キ下^カム 267。(単)暖^{ナン}短^{タン} 97。

殺^{セツ}(點開山)・斃^{セツ}墨^{シツ} 4、殺^{セツ}墨^{シツ} 77、斃^{セツ}墨^{シツ} 100 100 171

346、殺^{セツ}墨^{シツ} 126、斃^{セツ}墨^{シツ} 329——傷^{ヤウ}斃^{セツ} 102、斃^{セツ}害^{ガイ} 330、能^ネ斃^{セツ}者^{シャ}

350、傷^{ヤウ}斃^{セツ} 428。(慈)セ^セツ(1)。(天)鳥^{ニョウ}波^ハ尼^ニ斃^{セツ}設^{セツ}

雲^{ウン}分^{ブン}。 (名)寂^{シツ}木^キセ^セ子^シ 1115、殺^{セツ}木^キセ^セ子^シ又^ウシ 1122。

(単)殺^{セツ}作^{サク}結^{ケツ} 97、毀^{クイ}此^シ能^ネ 115。

蕪^ウ・蕪^ウ(屑明)・蕪^ウ炭^{タン} 126、輕^{ケイ}蕪^ウ 303、輕^{ケイ}蕪^ウ 332、輕^{ケイ}蕪^ウ

349——蕪^ウ炭^{タン} 127、不^フ蕪^ウ 172、輕^{ケイ}蕪^ウ 363、凌^{レイ}蕪^ウ 332 337、毀^{クイ}

蕪^ウ 333、蕪^ウ炭^{タン} 341、蕪^ウ炭^{タン} 520、蕪^ウ炭^{タン} 450、輕^{ケイ}蕪^ウ 506、蕪^ウ炭^{タン} 536

炭^{タン} 536、蕪^ウ炭^{タン} 552、凌^{レイ}蕪^ウ 563。(慈)蕪^ウ炭^{タン}車^{シャ}(1)。

(天)蕪^ウ炭^{タン}車^{シャ} 132、蕪^ウ炭^{タン}別^{ベツ} 182。(名)蕪^ウ

木^キ子^シ 966、蕪^ウ木^キ減^{ケン} 982。(単)蕪^ウ五^ゴ結^{ケツ} 116。(華)

凌^{レイ}蕪^ウ 375。(央攝庵羅經)蕪^ウ々^々。

攀^{パン}(刪合平滂)・攀^{パン}枝^シ 560——攀^{パン}枝^シ 303、攀^{パン}緣^{エン} 392、攀^{パン}枝^シ

440。(天)攀^{パン}邊^{ベン} 492。

關^{カン}(刪合平見)・關^{カン}閉^{ヘイ} 8、機^キ關^{カン} 342、關^{カン}防^{フウ} 583——機^キ關^{カン}

496、機^キ關^{カン} 553。(慈)口^{コウ}ワ^ワン(1)。(天)關^{カン}去^{キョ} 18。

焉 333、膽部 洲 129 — 膽部 洲 4。(慈)又(1)。

(名)木 州 木 シウ 1002。(圖)瀛洲 真云シウ 55。

愁 (尤平牀) 愁 惱 314、愁 憂 305 — 愁 歎 12。(慈)

又(1)。(天)愁 修 篇立部。(單)愁 道 82。

鷺 (尤平清) 鷺 鷺 398。(天)鷺 鷺 48。

鷺 (尤去睦) 不 鷺 410、不 鷺 456、不 鷺 553、鷺 嘗 593。

鷺 香 600 — 鼻 鷺 366、不 鷺 564、所 鷺 567、鷺 機 568、能

鷺 569。(慈)キウ(1)。(天)鷺 スイ。(華)鷺

者 375。

誘 (尤上喻) 誘 誑 559 — 誘 誑 562、誘 化 568。(慈)

工(1)。(天)誘 俞 569。(圖)誘 誑 云 上 西 真

云 由 94。(單)誘 世 音 67。(華)化 誘 367、誘

誑 370。

欽 (侵平溪) 欽 仰 332、所 欽 奉 434、欽 承 479 — 欽 仰

452。(慈)キム(1)。(天)欽 記 年 192。(名)木

キム 1032、吳 禁 1106。(華)欽 風 370。

禁 (侵去見) 禁 戒 48、不 犯 禁 327 — 戒 禁 8、36、325、370。

(慈)キム(1)。(名)上 金 又 去 和 平 763。(單)

禁 去 法 119。

蔭 (侵去影) 蔭 影 558、蔭 影 430 — 樹 蔭 567、蔭 影 129

588。(慈)オム(1)。(單)陰 蔭 蔭 74本 117。(華)

酒 蔭 370、蔭 暎 370。

斲 (覃平定) 斲 墨 4、斲 墨 100、斲 墨 126、

斲 墨 172、斲 墨 329、斲 墨 357。(天)斲 墨 貪 14。

(名)木 土 土 205。(華)斲 墨 363。

闇 (覃去影) 闇 冥 46、衆 闇 46、闇 冥 52 — 闇 冥 4

闇 冥 41、闇 冥 106、闇 冥 346、无 闇 380。(名)木 丁

ムオム 又 暗 837。(單)闇 阿 致 111。(華)癡 闇 372。

暗 (覃去影) 除 暗 22、法 暗 52、翳 暗 52、幽 暗 567

暗 在 暗 128、幽 暗 181、暗 鈍 332、幽 暗 435。(天)

暗 闇 篇立部。(單)暗 鳥 致 71。

含 (覃平匣) 含 苞 363、含 咲 569、含 潤 600。(慈)

カム(1)カク(1)。(名)木 我 云 1059。(法華經音)

含 後 音 18、後 南 友 18。(單)含 後 前 99。

斬 (咸上莊) 斬 其 首 332、斬 其 首 452、斬 截 455、564

斬 碩 552。(天)斬 其 首 342。(名)木 セ 1148。

減 (咸上匣) 廣 減 428。(慈)ケム(1)。(名)木

ケム 501。(單)減 後 曉 103。(華)歌 減 370。

掩 (監上影) 掩 泥 99、掩 蔽 479、掩 泥 500、掩 泥 539

掩 蔽 566。(慈)アム(3)。(天)掩 關 109。(名)

吳 歌 アム 313。(單)掩 於 歌 99。

泛 (凡去敷) 泛 海 444 — 如 泛 大 海 312。(慈)ホム

(1)。(天)泛 梵 聖。(名)汎 泛 吳 範 又 平 又 ハム

476。(圖)汎 泉 上 公 任 云 範 真 三 汎 汎 8、泛 長 真

五ハムボムス。

範公（凡上奉）ノリノミ 師範シノリノミ 332 範ノリノミ 44 303 381、ノリノミ 範ノリノミ 531。

（慈）ハム（2）。（天）範ノリノミ 54、範凡へ篇立部

範ノリノミ（蒸平見）ノリノミ 競持ケイジ 435 競持ケイジ 181、競持ケイジ 506。（天）

競業持ケイノミ 19。（無窮会本）競業持ケイノミ 19。

抑ヨウ（職開影）ヨウ 抑揚ヨウヤウ 1、抑挫ヨウサ 570。（無窮会本）

抑ヨウ 1。（名）吳億ニ ヌヨクク 338。（華）抑縱ヨウジヤウ 369。

弘コウ（登合平匣）コウ 弘雅コウヤ 381 和雅ワヤ 531。（天）弘コウ 弘コウ 391。

（名）木具キク 1083。（単）弘コウ 後ノミ 96。

以上が字音点たる安田本に出現した漢音形である。これ等につき一々の検討は省略するが、その出現の宛態から判断される理由については、これを三つの方向で考えてみる事が出来そうである。第一は、特定の語彙音として漢音形が使用されたと考えられるもので、次の諸字とその語形が該当する。

虹コウ 一 虹蛇
穆コウ 一 肅穆
偽コウ 一 偽身
寤コウ 一 寤寐、寤寐コウ
漁コウ 一 漁獵

寤寐コウ（字類抄）

鼓コ 一 鼓散

虎コ 一 虎豹

盧コ 一 蘊迷盧山

啼コ 一 啼泣

帝コ 一 帝利

灰コ 一 灰燼

覺コ 一 覺心

昵コ 一 津昵

慇コ 一 慇懃

慇コ 一 慇懃

健コ 一 健達縛、健人

殺コ 一 烏波尼殺曇

頑コ 一 頑巖

娜コ 一 半娜娑菓

若コ 一 若（字門）（三十二字門字）

平コ 一 平復

平復コ（字類抄）

嶺コ 一 雪嶺

罔コ 一 罔圖

零コ 一 零落

螢コ 一 螢火

樓コ 一 樓臺

啼泣（字類抄予部）

但し、以上の中には、当該例が一例のみのものが含まれており、それ等は尚特定語彙音と認定してしまふ事が躊躇される面が残る。然し、複数例が有り而もそれ以外の場合呉音形を取るもの（典型例として「刹帝利」に対する「勝帝」、「帝相」、「帝網」、「帝青」、「灰燼」に対する「灰土」、「灰粉」、等は、正に漢音が語形（彙）音として固定していた為

に出現したと考えねばならない。ところで、無窮会本系音義の項でも指摘した所であるが、通常の吳漢認定規準から言えは漢音形に当るが、対立形としての呉音形が見出せない為、右に取挙げる事を控えたものが有る。

- 鷺ア（盧玄微）…青鷺398。（名）禾ヌ 1173。
- 器ミ（真平疑）…頑器181、頑器435。（天）頑モ 器ミ 191。（名）禾ギ 162。（華）頑リ 器ミ 370。
- 苳ゴ（侵上日）…苳ト 苳ト 399、苳ト 苳ト 592。（天）苳モ 苳ミ 409。（粟甲）苳ト 苳ト 409。（名）苳ト 苳ト 苳ト 409。

苳ゴ（塩上日）…同右。

鹹カ（咸平匣）…鹹カ 鹹カ 553、鹹カ 鹹カ 504。（天）鹹カ 鹹カ 1257。

仍ニ（蒸平日）…仍ニ 未ミ 375、仍ニ 為ミ 430、仍ニ 為ミ 503、仍ニ 為ミ 528、仍ニ 為ミ 558。

仍ニ 將ミ 590。（名）吳ニ 乘ミ 255。

以上を、呉音の一般傾向から見る時、それらの呉音形は「鷺ミ」、「鷺ミ」、「器ミ」、「苳ミ」、「苳ミ」と見る事が出来る。然し、その呉音形と見られる形は管見に及ばない。その理由として、右例の大部分は清濁音字に属し、我が呉音の祖

系音に既にその非鼻音化が現われていた事を否定し去る事は出来ないから、濁音形が本来の呉音形であった為と見る事も出来る。亦別の理由として、右の大部分は特定の語彙に限って使用される（「青鷺」、「頑器」、「苳ト」、「鹹カ」）ものであるとも言え、

その漢音形が固定した特定語彙にしか使用されないという正にその理由に依つて呉音形が見出されないという事も考えられる。いづれとも今決定出来ないが、かくして、右の諸字も亦特定語彙に伴う漢音形の混入例である可能性を考えておかねばならない。

次に第二は、出現する例に於て全て乃至殆どが漢

音形で出現しているもので、次の諸字がそれに該当する。

聾¹⁰³²、容¹⁰³²、玉¹⁰³²、喙¹⁰³²、施¹⁰³²、模¹⁰³²、慕¹⁰³²、徒¹⁰³²、泥¹⁰³²、麗¹⁰³²、塊¹⁰³²、謹¹⁰³²、繁¹⁰³²、媛¹⁰³²、蔽¹⁰³²、環¹⁰³²、環¹⁰³²、映¹⁰³²、映¹⁰³²、碧¹⁰³²、投¹⁰³²、后¹⁰³²、洲¹⁰³²、愁¹⁰³²、飲¹⁰³²、合¹⁰³²、斬¹⁰³²、抑¹⁰³²

「聾」の呉音は、央麻廬羅經に依り「リウ」と考えられる。これは「龍」の漢音「リヨウ」・呉音「リウ」に平行するものである。安田本では一例、然も「龍」に誤写したものに「リウ」が左側併記例として出現しているのみである。慈光寺本及び天理本音義も共に「リヨウ」形のみである。名義抄では「リヨウ」・「リウ」の二形を認め、法華經單字でも「カ勝反(ヘリヨウ)平声」・「呂虫反(ヘリウ)去声」の二形が登録されている。名義抄の二形は別に論じた様に大般若經読誦音の生の形が反映したと考える。同様に、法華經單字の場合もその生の読誦音形が反映した所謂両音字と考えられる。かくして、安田本の如き大般若經字音点では、漢音形「リヨウ」が優勢に使用されていた事になる。「リヨウ」が漢音である事は声調平声からも支持し得る。

「容」の呉音は「ユウ」・漢音は「ヨウ」である

う。但しこの字の場合、安田本では前者去声、後者平声となるらしい。名義抄では「ヨウ」・「ユウ」を認め、前者漢音形に平声が加添されており韻書の声調と一致する。(天)(単)(華)では「ヨウ(去声)」のみである。同韻字の「鎔」には、安田本「鎔練⁵⁷⁴」が有り、名義抄にも、呉音容¹⁰³²とあり呉音形で読まれている。安田本で「容」の出現比率は、「ヨウ」九例、「ユウ」二例で、漢音形が優勢である。

「玉」は「瑩玉」という熟語にのみ使用されている。この事と関係有るか否か今不明である。出現比率は「ヤウク」七例(一例は併記例)、「ゴク」三例(一例は左側併記例)である。

「喙」字に、呉音「トク」を認めた。その理由は安田本に一例左側併記例として「トク」が有る事、同韻字に「敷¹⁰³²」・「濁¹⁰³²」とオ列音が出現する事に依る。先表に見る様に、「トク」は安田本一例のみで他はいずれの場合も「タク」のみである。

「施」は、呉音形「セ」は安田本に一例左側併記例としてのみ出現する。但し、「シ」の加添されているのは、「布施」・「施行」・「施主」の如き典型的な仏教語でないものである事(以上いずれも大般若

經には頻出するしは意味が有るであろう。その事を強調すれば、特定語彙に伴うものである事になるが、今断定するだけの資料がなく、一応ここに収めて処理しておく。

「摸」は、安田本「揆摸」「作摸」に出現する。天理本の項では「揆（規）摸」という熟語に伴う音として漢音形が出現したと考えたが、安田本では更に「作摸」が加わる為、そこからはずして考えた。

「慕」は、央極魔羅經に「ム」とあり、これを吳音と考えた。従って、安田本以外の諸本全て「ボ」と漢音形である。

「徒」は、南海寄歸内法伝百点に「法徒」と吳音形が見られ、ここでの当該資料では全て漢音形のみである。

「泥」は、凶書寮本真興音に「ナイ」と吳音形が見られるのみで、他は全て漢音形である。

「麗」も亦、安田本に一例左側併記例として吳音形「ライ」が出現するのみで他は全て漢音形のみである。

「塊」は、慈光寺本に二例「エ」と吳音形が出現するのみで、他は安田本を含めて全て「クワイ」と漢音形のみである。

「謹」は、左側併記例として一例「ゴン」と吳音形が出現する。天理本では、「キン」「ゴン（謹）」の二形が出現すると解される。

「繁」は、安田本では漢音形「ハン」五例（一例は左側併記）、吳音形「ボン」一例（右側併記）の比率である。慈光寺本は、「ホン」二例のみが出現する。

「蔽」字は、安田本二例出現するが、一例には「タン」「ナン」「ネン」の三形が併記されている。この例など、加點（註誦）に際して試行錯誤した結果が典型的に反映していると考えられる。そして、その營為の過程で漢音形が混入する場合の在る事を物語るものであろう。

「環」は、共に、安田本では併記例として僅かに吳音形「クエン」が見られるにすぎない。そして共に、凶書寮本真興音では「又音」として吳音形が掲げられている。このような例は他にも存し、真興音が大概若経読誦音の反映である事を物語る。

「映（映）」の漢吳の出現の仕方は全資料に亘って複雑である。但し、安田本では漢音形「エイ」が十一例（三例併記例）、吳音形「アウ」が四例（三例併記例）で、漢音形の方が優勢である。

「碧」は、安田本では全て漢音形で、二例に「白（反）」が併記されている。この「白」は漢音で読んで呉音形「ハク」を示すものであろう（天理本「碧薄」に依る）。中に「入声軽」の声点が入声重と共に併記されている所を見ると、この「ヘキ」は明らかに漢音形と意識されて加点されたものである。或いは「碧緑」という語彙に伴うものかも知れないが、他の熟語が出現しない為に断定出来ない。尚、圖書寮本真興音「ヘキ白」は安田本卷四五一、四五七の付音例と一致しており、両者の連りを思わせる。「投」字、安田本に「徒候反赤尾云多分古音義ニ用豆反ヲ可用セ」とある。この「赤尾」が未だよく分らないが、「投」と「豆」は別韻であるから、「豆反」を用いた音義は本邦撰述音義であつた事は確かである。安田本卷四四七の「投」は、別にその音義を利用して加点した事も考えられる。この「豆」を不用意に読めば「トウ」と読む事になる。漢音形の混入には或いはこの様な過程を経たものが入り込んでいゝる事が考えられるであらう。この字、慈光寺本では呉音形「ツ」一例が見られるが、天理本では「等」と漢音形である。

「白」字、安田本は漢音形「コウ」のみ、安田本

での「居、コ」は呉音形「ゴ」を示したもののか。「洲」字、安田本卷五六二では平声軽が加点されており、この「シウ平声（軽）」が漢音形である事が知られる。圖書寮本・観智院本名義抄も亦平声軽である（観智院本の「シウ」は意図は不明乍ら上声の声調を併記又は訂正したものであろう）。東大国語研究室本大般若経卷一も全て平声軽である。かくしてこの字は、漢音形が一貫使用されていた事になる。

「愁」字、仮名書音形「シウ」は一応漢音形と考えられるが、共に声点は去声で呉音形と考えられ、尚漢音と断定してよいものかどうかは疑問が残るものである。

「欽」字、安田本に一例のみ左側併記例として「コム」が見られるのみで、慈光寺本、天理本、名義抄、華嚴経音義も「キム」と漢音形のみが出現している。

「合」字に呉音形として「コム」が有つた事は、法華経单字「後音反」に依つて知られる。この反切下字「音」は、「今記音反」「金居音反」「嚴後音反」「貪多音反」に使用されているから、「㊦ム」を示している事は確かである。従つて、この字も、ここで取

薩^{サツ}、聞^{ブン}、暗^{アン}、滅^{メツ}、掩^{エン}、泛^{ハン}、競^{キョウ}、弘^{コウ}（右の中、「塚」の「キヨウ」を漢音「キヨ」を吳音と考へた。同韻字の吳音に「奉」^{ホウ}、「供」^{コウ}、「種」^{チュウ}の単呼音が存在する事をその根拠とする。「平」の中、「平復」^{ヘイフク}は同形が色葉字類抄に見られるから、この場合は熟語音として入つたと推定した）。

これ等の一字一字について、その混入の理由を指摘する事は出来ない。多分に偶然的な要因を考へねばならないであろう。亦「准阜」の「タイ」^{タイ}、「顔」^{ガン}、「顔容」の「ガシ」^{ガシ}、「弓弩」の「キウ」^{キウ}、「下」^カ等は、それ等の字が熟語の構成要素である事と関係無いと言ひ切れないが、熟語形として混入したとも断定が今出来ない為、ここに位置づけたものも含まれている。

但し、この第三グループに分類した諸字は、安田本での付音が漢音形であるに對して、音義である天理本や法華經單字で吳音形で出現するものの比率が非常に高い事は確かである。その事は、正に、安田本が具體的な読誦行為の結果を生そのまま反映しているに對して、天理本や法華經單字の如き場合は、正に、音義という語、字を切り取つた形に仕立てる為

に、ある程度の意圖的な抽象化・整理化が行われた結果が反映した為と考へられるのである。大般若經六百卷を通読する場合、一字一字全てについてその音の典拠を求めて行つたとは考へ難い。恐らく現存の安田本の如き加點の奥態は、既得の字音知識に依つて加點しつつ、難字に行き當つた時に韻書・音義や先行の加點本等を参照したと考へるのが妥当であろう。そう考へた場合、漢音の混入は、その既得の字音知識そのものに於て吳音と漢音の區別が失われていた（即ち、吳音・漢音の明確な認識が一個人の収得知識に於て弛緩していた）事と、もう一つは、依り所とした韻書や音義に依る人為的音が結果として漢音形を取つた事、が考へられるであろう。前者の例としては、安田本での二形併記例がさういふ背景を有しているものではないかと考へる。後者の例としては、例えば「誨」^{ヘイ}の如き例が挙げられると考へる。この反切からは「クワイ」の音しか導き出せないが、「荒」は吳音でも「クワウ」^{クワウ}、内は吳音「ナイ」であるから、反切上下字を吳音で読んでも、「クエ」は導き出せないはずである。この反切から音を導いた結果が仮名書音形「誨」^{ヘイ}の如き形になつた場合が有つたと考へる。

斯くして、この第三群の場合は、一々を突きと
得ない偶然的要因と言わざるを得ないもの他に、
敢えて考えれば、以上の如き二つの要因に依つて漢
音形混入の結果となつたと考えるのである。

三、纏め

大般若経読誦音にも漢音の混入が有る。その場合、
漢音の混入の度合から、字音点と音義とで異なる。
即ち字音点に於る方が音義に於るよりも混入の比率
が高い。これは、音義に編述される事がある程度の
抽象化を経るといふ性格を有しているからと考えら
れる。然し、その音義も完全に本文の生の読誦音か
ら脱脚し得ていないとせねばならない。
大般若経読誦音に漢音形が混入している実態とし
て、(1)特定語彙に伴つて出現している場合、(2)当該字そのも
のが全て漢音形に統一されて出現している場合、
(3)偶発的に劣勢に漢音形が出現している場合、が有
ると見られる。これを要因の側から考えると、(1)は
慣用の語彙音として漢音が固定し、それがそのまま
取り入れられたものであろう。当該の個所で比較を
試みた様に色葉字類抄の形と殆ど共通する所から、
ここに言う慣用は単に仏教社会の仏教語としてとい

うより、更に広い日常語（色葉字類抄の掲出語の性
格を一応その様に規定して）の範囲にまで広げて考
えてみる必要が有る様に思う。その場合根源的な問
題としては、大般若経の様な仏典の用語が日常語に
なつたものか、日常語が大般若経読誦に採用された
ものか、という相互の影響の方向性の問題があるが
今それについては明確な解答を用意する事が出来な
い。但、今、大般若経読誦音に於る特定語彙に伴う
漢音混入の要因だけに絞つて考えるならば、読誦に
當つて利用されたはずの初期の大般若経音義が、熟
語掲出であつたという事は無視出来ないであらう。
例えは、今、信行の撰と言われている大般若経
音義中巻零本（東迎院本）では次の如くになつてい
る。

健行（注略以下同）	瑕隙
善現質言	喧諍
所纏棧故	醫醫
何所徵責	樂穴
住想勝解	標幟
不問	吐男子
裂走	標堅固鎧
毀譽	資料

この他、奈良時代から使用された彼土・本邦の諸仏典音義も多くこの形であった。本文から切り取られた右の諸語が独立してその語の音形を独自に構成して行つた事は十分考えられる所であろう。その際、これ等の音義の行われた奈良末・平安初期では朝廷による漢音奨励がなされていた事を考え合わせる必要がある。次に、②は、いまだ仮説の段階ではあるが当該字の常用音として漢音形が固定して行つた為と考える。③は加点者の既得の字音知識に呉・漢の區別が弛緩していた為、読誦の過程で韻書・音義の音注を利用した為、という二つの主要因に、個別の偶発的要因がその周囲に有つたものと考える。音義の場合には、この④の場合に属すると思われるものは少ない。音義編述行為は、本文読誦加點行為よりも一層深い反省的思考過程を経なければなるまいから、その過程ではやはり非吳音的なものが排除される機会が多いはずであろう。

- 1 〃 圖書寮本類聚名義抄と石山寺本大般若経字抄とについて、〃 国語学、第一三・一四合輯号。
- 2 〃 その解釈については、既に岡井慎吾、大般若経字抄につきて、〃 国語、国文、昭和十二年二月号。渡辺修氏注、引用論文、高松政雄、公任卿云、吳音、〃 国語国文、第四二卷三号。でそれとされしている。筆者の見解は基本的には岡井、高松論文と同じである。
- 3 〃 別音に平声疑母の音が有るがここでは捨てて処理出来る。
- 4 〃 藤島裕、大般若経音義の研究、本文篇に収められた、無窮会本・天理本・薬師寺甲乙丙本を言う。以下は全てこれに依る。
- 5 〃 この音義の編者の既得の字音知識に依つて、その常用音を基盤とする漢字で仮名書音形を示したものの、〃 というのが、この音義の系統の音注の本質ではないかと考える。
- 6 〃 尤も、新しい様相を呈す天理本や薬師寺本諸本の成立は、無窮会本の如きものを本に、それを部分的に改変して成立したものにすぎない事も考へ

られるから、その場合は天理本以下にはこの考
方は宛てぬ得ない事は言うまでもない。

7 「訓点語と訓点資料」第四輯所収。

8 「国語学」第三輯所収。

9 古辞書叢刊複製本とその頁数。

10 大正新修大蔵経五十七卷所収活字本とその頁数。

11 安田本では「寤寐」は、左側付音は「コミ」と
有り誤音形であるが、声点に平声と去声を加えら
れており、実質上誤音と漢音の併記例である。即
ち、「コミ」「ゴビ」の両形が付音されているの
であつて、その漢音形は語彙音としての形が併記
されたと考ふる。

12 「図書寮本類聚名義抄」「真興音（和音）」論統
紹」（「国語と国文学」昭和五三年十月号）。

13 単なる連りでひく、安田本の加点が真興の「大
般若経音訓」或いは真興加點本を参照した可能性
も皆無ではない。注12引用拙論参照。

14 但し九条本法華経音は「後南反」で「ガム」の
音が採用されている。

15 今日東寺等で行われている大般若経転読は数人
で経題と品名及び訳者名のみを読み上げ、数十分で
終了するのであるが、平安朝の転読は、百人で一

人一日二卷宛二日間で終了した記録等がある所か
ら知られる様に、大般若経各巻を全巻読誦するも
のであつたと考えられる。

（本稿の要旨は第三回鎌倉時代語研究会で発表し
た。後に小林茅規先生の補訂を頂いて成稿とし
た。亦原紙作成は牧野泰子氏の御尽力を頂いた。
併せ記して深甚の謝意を表す。）